

国立国会図書館新収の大図模写本について

鈴木 純子

昨年、気象庁の図書館から国立国会図書館に寄贈された「伊能図」の大図模写本四三枚（以下当図と表記）については、本誌第十三号に渡辺一郎氏の報告があるが、多少の補足もかねてその概要を紹介する。なお、当図を含むこのたびの寄贈資料については、保存対策、整理等のために現在はまだ一般に利用できる態勢となっていないが、公開以前に次の二つの展示会で対象地域の異なる各四面ずつが展示される予定となっている。

● 「国立国会図書館開館五十周年記念 貴重書展」(国立国会図書館)

六月九日(火) ～ 二〇日(日)

● 「伊能忠敬展」(江戸東京博物館)のうち

六月十六日(火) ～ 二二日(日)

一 本図の概要

文政四年(一八二二)上呈の『大日本沿海輿地全図』大図二二四枚のうち四三枚、関東地方を中心に中部地方東部から東北地方南部にかけての地域を連続的にカバーする。

楮紙を貼りつなぎ、雲母引きの裏打ちを施した料紙に描かれている。縦長、横長の図が混在するが、紙の幅(短辺)は二二四センチ(測定誤差も含むミリ単位の差あり、第九〇・九三のみ一一七・五センチ)とほぼ一定し、長辺には二二四～二二一センチと図ごとの違いがある。

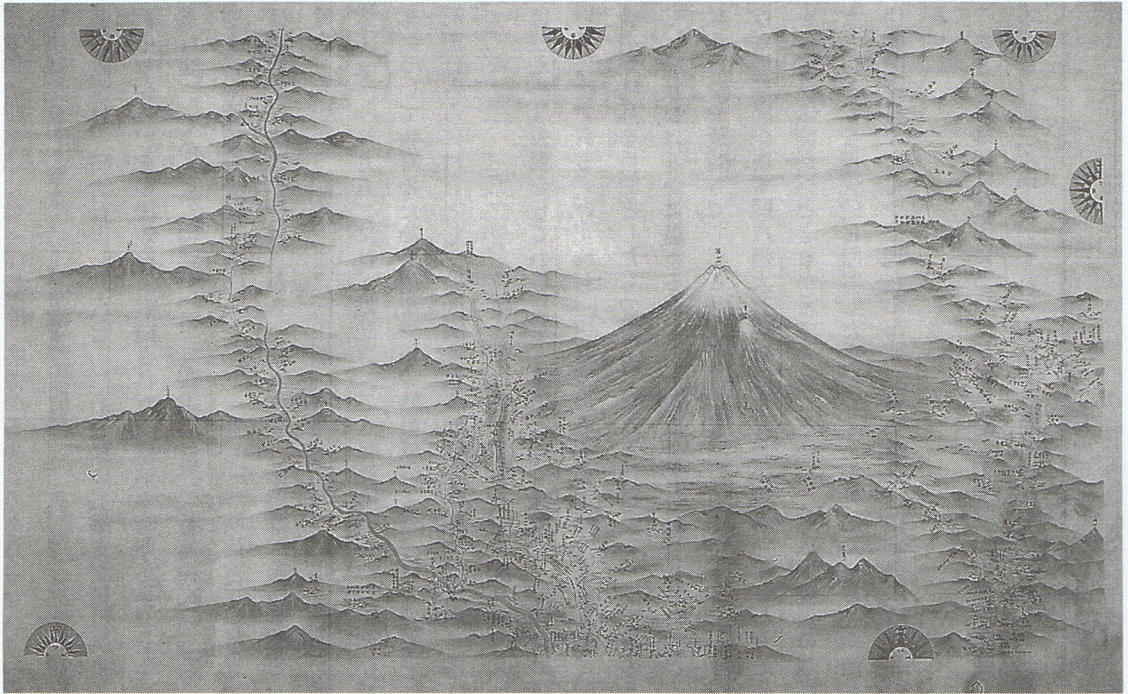
各図とも周囲には余白があり、図の描かれている部分の大きさは一定

していない。山地の緑色が卓越する彩色図である。針穴はない。一見して伊能図、大図といえる。タイトルにかかわる記載事項としては、各図裏面肩の部分の「関八州 第〇〇 国名(複数併記のものあり)」という墨書と、一枚だけ残っていた巻帙に書外題「実測輿地図 関八州」がある(一部の図には表面にも「第〇〇 国名」の記載がある)。描法、記載事項、縮尺等から大図であることを、地図各号の収図域を最終版大図の一覧図と照合することによって最終版のものであることを確認した。気象庁旧蔵という点は、模写の事情などを探り、本図の位置づけを知るための有力な手がかりを提供するものである。

二 描法・記載事項・縮尺・図郭など

量地筋の折れ線、駅町の○、緯度測地の☆を朱で描く。図によってやや精粗があるものの描画は全般に丁寧で、地名は楷書体で整然と記されている。○と☆は印判ではなく手書きのため形の崩れたものもまじり、量地筋についても折れ線のシャープさに欠ける部分がある。海・川・湖沼の青、砂浜・河原の黄色、樹木を配し山麓をぼかした山地の緑、平地部分の淡褐色などいずれも伊能図の特色を示す。城や主要な寺社にはその名称、城主名、街道(測線)沿いに国郡界、村名、知行者名が記入されている。また、隣接図との接合の合印として図の周辺各所にコンパスローズが描かれている。しかし、模写にあたった絵師にはその意義が十分理解されていなかったのか隣図と色が違ったり位置がずれたりしているものもある。文化十二年以後の測量にかかる富士の裾野や伊豆七島などが含まれている。

縮尺については距離測定の起・結点の確認ができず、正確な算定ではないが、東西南北の辺がはっきりしている図(たとえば江戸を含む



伊能図第100 甲斐 駿河 (広報用写真)

(国立国会図書館提供)

「第九〇 武蔵 下總 相模」の収図域を現代図上に落とし、その辺長を比較すると三六〇〇〇分の一に非常に近い値となる。

図郭については一覽図*と照合して地図番号、紙の縦横方向、図域などの一致を確認した。この一覽図は国立公文書館内閣文庫所蔵の『輿地実測録』の付図「地図接成便覧」を活字化したものである。写真を利用して全図幅の接合状態も概観した。（*保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』一九七四所載、本誌第十三号渡辺報告にも転載）

三 本図の来歴

当図が気象庁に伝えられてきた事情は気象庁の出自から説明できる。むしろそのことが本図のなりたちを推論し、判断するための有力な根拠だということは前記のとおりである。

細部は略すが、気象庁の前身である東京気象台は明治八年（一八七五）、内務省地理寮（のち地理局、以後特に必要のない限り地理局と記す）内に設置された。明治二〇年（一八八七）より中央気象台、昭和三年（一九五六）に気象庁となっている。気象庁は明治初期には地理局と同一の組織だったわけで、地理局旧蔵資料の一部が気象庁内に引き継がれてきたことはしかるべきなりゆきの一つといえる。実際、今回の寄贈資料中にも地理局測量課の印記のあるものや地理局作成図の手書き原図と思しきものなどが混在する。本図には印記はない。これについてはあとでふれる。

次に地理局と「伊能図」のかかわりを見よう。「伊能図」が資料としてさかんに利用されたのは維新後、近代的測量による地図が整備される以前、すなわち明治初期のことであり、この時期がさしあたっての調査の対象である。内務省年報は明治八年以後のものしかなく、以

後数年の記事中には「伊能図」関係のものは見あたらない。『伊能忠敬事蹟集纂』（東京大学史料編纂所蔵）によれば、佐原の伊能家所蔵の副本は、明治五年（一八七二）十一月に工部省測量司が謄写のため借り受け、その後政府に献納された（献納の時期不詳、七年八月に賞与金）。そのほか館澤彦「日本測量野史稿」（師橋辰夫「三拾三年之夢 日本測量野史稿」地図九一、一九七二）明治六年二月の項には、伊能源六（忠敬の曾孫）から「日本大図」を借り、絵画者を募って謄写させたという記事、また河田熊「本邦地図考」（三）（『史学雑誌』六一七、一八九五）には、地誌課（ここは両者合わない）が伊能家副本について謄写のため借用を請い、結果献納となったとの記事がある。河田はさらに付言として「大図ハ曾テ地誌課ニ託シ其管内一部ヲ謄写スルモノニ、三県アリ、（以下略）」としており、大図の謄写については控えめな表現をしている。館、河田ともに測量司、地理局に籍をおいた人物である。いずれも回想録のため不確実な面は残るが、副本の借用が謄写を目的としたものであったことは窺える。四三枚の大図は二、三県をはるかに越えるが、二一四枚全部が謄写されたかどうかとなるとやや疑問もでてくる。「関八州輿地図」と称することについては、地理局がまず関八州大三角測量を計画（明治九年）し、その進行をみて全国測量へとときりかえていることから、関八州測量の基礎資料としてこれを優先的に謄写したということも考えられる。明治初期の伊能図謄写をめぐって現在わかっている情報は以上のようなものである。

さきに地理局旧蔵印について述べた際、本図については保留した。

本図には四三枚中のいずれにも印記は見られない。しかし、「第九五 信濃 上野」に「関八州用大川ヨリ預リ」という付箋がある。姓だけしかないので確かではないが、これは当時地理局に在籍し、前掲の

『伊能忠敬事蹟集纂』に「東河伊能翁小伝」の記事を寄せる大川通久を想起させる。印記はないがこれらの図の起源を地理局にもとめる有力な根拠といえよう。この図は「伊能忠敬展」で展示される予定である。

文化十二年に命をうけたとされる『日本輿地全図』作成にあたり、忠敬は態勢が十分に整わなかった初期の東国の測量については補測を願っており、全図作成と平行して関東の街道支線、川、湖沼等の測量許可を幕府に申し出ていたが、これは不調に終わり、かわって江戸府内測量が命ぜられた。本図四三枚中約半数は忠敬としてはなお手を入れたかった部分ということになるだろう。全四三枚を一望するとその心情がしのばれる。しかし江戸府内測量に発展した江戸市中の繫測の結果は、「第九〇 武蔵 下総 相模」図幅に表れている。

当図調査のため、現存するいくつかの大図を閲覧する機会を得た。このうち歴史民俗博物館所蔵で従来寛政十二年上呈大図とされてきた奥州街道の二図については当図と同系の最終版大図模写図であると見られる。前記のようにこの地域についてのデータは寛政十二年時点のものを出ていないので早くからこのような年代推定がなされてきたものと思われるが、料紙、描法も当図と酷似するだけでなく、裏面に記された「第五六 岩代」「第六九 下野」の文字も同じである。なお「第五六 岩代」は当図の範囲内で唯一欠図となっている部分である。同館の残る三枚の最終版大図も同系のものであろう。当図のうち「第五四 磐城」に「二枚写」という付箋があり、部分的に複数模写されたものがあつたのではないだろうか。

六月の「貴重書展」では本図の一部を電子化し、隣接図の接合なども画面上で実現できるように展示ができるよう準備中である。

（すずき じゅんこ・国立国会図書館特別資料課）